

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.19

浜風会/入会募集中  
毎月第1,3木曜日

## 大地震の歴史

### 東日本大震災動弁

3・11は地震、津波に加え原発事故まで及び未曾有の大惨事になった。自然の力は凄まじく今まで築いてきた人々の蓄積を一瞬にして押し流してしまった。現代の様々な仕組みを根本から見直すことを迫られている。

わけても東海地震が予測されている私達の地にあつては、あのような大津波が来たら一たまりもないと心配しきりである。そこで大地震の歴史を振り返ってこれから起こるであろう地震に備えたい。

想定を超えた地震？  
今回の地震で盛んに言われたことに「想定外の超巨大地震」であったと、マグニチュード6.0は正に日本では初めての大きさであるが、三陸沖から茨城沖に至った運動型の地震は、私達のこの地域においても、東海地震と南海地震が連動して起こっているように古代から何回も起こっている事実である。(下表参照)

津波に絡む「長里郷」  
今切の発生や地殻変動で現在の浜名湖の形になったとか、篠原地区にあつては舞阪町北にあつた

### 遠州地方における大地震の歴史

発生年月日 西暦	2011年 から	地震名	マグニ チュード	被害状況 (記録の一例)	特筆事項
永長1年 1096.12.27	915年 前	駿河国 東海	8.3	寺院神社及び民家 400余流失す(沼津)	関白職の日記 近畿地方に及ぶ
明応7年 1498.9.20	513年 前	明応*	8.3	浜名湖で地殻変動、 湖底に没した所あり	今切れが切れた 要因
慶長9年 1605.2.3	406年 前	慶長*	7.9	志都呂の今切番所が 津波で壊滅	房総半島沖合 ～紀伊水道沖合
宝永4年 1707.10.28	304年 前	宝永*	8.4	この近辺の震度6で 津波が3-5m	49日後に 宝永山噴火
安政1年 1854.12.23	157年 前	安政 東海*	8.4	坪井(標高3.7m)馬郡 (標高3.2m)が一面浸水	翌日南海地震で 死者3万人
昭和19年 1944.12.7	67年 前	東南海	7.9	浜名郡で死者40人 鈴木織機で3人死亡	戦中下、津波は 遠州灘で2m以下

『静岡県史 別編2 自然災害誌』を参考にしてまとめた  
\*は連動して発生した地震を示す。 / 年月日は太陽暦で示す

長里郷が明応等の大地震、津波で水没し、命からがら篠原の地に漂着した等の伝説が残っているが、この地の被害の全貌はよくわからない。現在生きている人が知っている東南海地震では、津波の被害は無かったが、それ以前の大地震では常に津波が伴っていたことを意識したい。それは誰も実感していない百五十年以上前のことであるが、想定は出来ることである。

### 新しい被害想定からの対策を

静岡県の予想される東海地震の第三次地震

今回の大震災を受け、専門家による被害想定を抜本的に見直す筈である。  
その着目ポイントは次の三点であろう。  
① 今度予想される東海地震は、南海地震等との連動型地震になるのか。  
② マグニチュード6.0程になるのか。  
③ そうなるとしてこの地域における津波の高さは。

その新しい被害想定から本格的な対策を具体化しなければならぬ。  
後世に引いて安心できる町を

被害想定では、私達のこの地域の津波被害についてはゼロ%であった。果たしてそのとおりで済めば、問題ないが、静岡県は後世に引いて安心出来る町を残したい。  
東南海地震、終戦後、世の中は大きく変わった。車社会が到来、交通の外家電、通信、コンピュータ、原子力利用等世の中は一変している。また一方、前に浜名バイパスが通り、一号线、新国道、新幹線が走り、津波に対してもいくらかの効果を期待したいところが変わっている。増してや百年以上昔からすれば現在は、人口増、住宅増と共に文明社会になっている。この地において私達は、それらに相応しい津波対策をしてきただろうか。  
専門的見地を基に、史実を侮らない取組みで、後世に引いて安心出来る町を残したい。

### 平成23年度主な活動

#### ★ 山下孝先生講座

- ①奈良・世界遺産の裏表
- ②広重五十三次→街道の見方

#### ★ 本年のテーマ

- ・合併頃の史実掘り起し
- ・ふるさと資料室新テーマ揭示

#### ★ 主な自由研究

- ・篠原村誌増補篇からみた昭和
- ・加宿と助郷
- ・終戦直後の塩づくり
- ・年貢皆済手記より
- ・篠原旧街道の店模様
- ・東南海地震と大震災
- ・神社仏閣と祈り
- ・「篠原村入用帳」より
- ・井伊氏と日蓮上人等

#### ★ バス旅行/小旅行

- ・近江路を訪ねる「彦根城」
- ・郷土の偉人記念館巡り

# 江戸時代の加宿と助郷

坪井村  
馬郡村  
篠原村

篠原村誌（大正二年編纂）沿革の項に、「江戸時代幕府領としての篠原村は、中泉代官と名主で主として村内を治めた。東海道の要路に当たり舞坂・荒井の渡船場を控えたるを以て、夫役を差立つ村として坪井村・馬郡村は加宿として、所要の人夫の十二分の二を出す。其の法十二支の数に割り坪井十二分の一、馬郡十二分の一を出す（当番時）。篠原は助郷として、本宿舞坂より割当てられたる人夫を出す」以下略とある。この件について調べてみる。

## 一・加宿

### 1. 舞阪町史より

舞坂宿では、舞坂だけでは宿立人馬を用意することができず、坪井村馬郡村を加宿とし、この二力村で提供する人馬を足して、一宿分の継立業務を行なった。加宿助郷ともいう。

この加宿は、五街道の中でも、中山道に多くみられるが、東海道でも駿河・遠江・三河国の宿駅に広くみることができる。遠江国では、舞坂宿の二力村のほか金谷宿が河原町を、新居宿が橋本村を、白須賀村が境宿新田を、三河国が大岩町を加宿としている。

加宿を設定した時期や本宿・加宿の人馬勤役率は、各宿の事情により一定しない。坪井村、馬郡村がいつ頃から舞坂宿の加宿となったかについては、元禄十三年（一七〇〇）の火災に

よる関係書類の消失で分からなくなっている。

単なる推測にすぎないが、舞坂宿への加宿の指定は、延宝八年（一六八〇）八月の天津浪による被災が契機となったかも知れない。

嘉永三年（一八五〇）八月加宿と諸助郷に関する幕府の質問に対し、舞坂宿から次のような答申書を提出した。

当宿加宿被仰付候年月、并定助郷御取極助郷帳御渡被下置候年月、其後休役助郷并宿余荷勤等、其外勤割合入狂被仰付候度毎年御尋二付、取調左ニ奉申上候、

加宿  
一、村高百六拾壹石三斗五升八合 坪井村

一、村高三百拾壹石三斗六升四合 馬郡村

宿立 七拾人 馬 六拾匹

是八二日本宿番二而相勤、一日加宿番二而相勤、当番之日者人足七拾人立切候儀二而、馬者本宿、加宿共打混、順繰二遣ヒ申候

これにより当時、舞坂宿では人足については二日間を舞坂宿、一日を坪井、馬郡村で勤めた。馬は舞坂宿、両村が日程を区分しないで混同し、舞坂宿が全体の三分の二、加宿二力村が三分の一の割合で勤めていたことがわかる。

加宿の坪井、馬郡村が合せて舞坂宿の宿立人馬の三分の一を負担していたから、それに対する領主側からの種々の助成も原則的にはその負担率で配当したようである。地子免許など。

## 2. 国史大辞典より

加宿とは、江戸時代に諸街道の宿駅の負担を軽くするために、宿に常備すべき人馬のうち若干を負担する村や町。宿に地つづきの村が多い加宿助郷、宿余荷助郷など。

城下町などでは、宿つづきの町を加宿とした例が多い。この場合はもとの宿を本宿、新しい宿を新宿ということもある。加宿は一般の助郷より負担が重い。宿から遠距離の村では金銭で代納したこともある。

## 二・助郷

### 1. 舞阪町史より

舞坂宿助郷 篠原村他拾力村

### 2. 百科事典より

江戸時代宿駅常備の人馬の不足を補助した村。またその農民に課した夫役（労役）

負担の割合は村高によって決まり、助郷人馬には御定賃銭が給されたが、少額のため各村から補助金を出さねばならず、また農繁期には農業生産に大きな支障をきたし、農村疲弊の因となった。このため助郷免除をめぐる紛争が生じ、勤役拒否や農民一揆も起きた。農村では次第に労役に代えて金納化するようになり、問屋場ではその金で道中人足（雲助）を雇うようになった。明治四年宿駅と共に廃止された。

# 「坪井村 篠原村(東)の五人組帳」 冊子発行

会員 中山 清

## 一. 五人組帳との出会いとそのあらまし

旧庄屋(相曾園一郎様宅)で保存されている古文書を拝見した出会いからこの五人組帳研究が始まった。(浜風会会報第三号に報告)その後、篠原村五人組帳も鈴木七兵衛家文書より発見されたので、冊子にまとめた次第である。

五人組帳の発行年は、江戸時代後期のものである。此の時代の公文書や書簡等、どの文書をもても流麗な毛筆書きで、しかも漢文調である。見るほどに内容を知りたいと興味が湧く。そこで字句の解説、解釈は斯道(しどう)に明るい識者にお願いし取り掛かる。

この時代住民は五人単位で一組として、その中の一人を組頭に選出した。標題の次に組員の守るべき法規が列記されている。町村役員や各五人組員が連署連判し、此の条文に違背しない旨の証文を付け、御公儀(幕府)へ提出した。前段の法令部分を「五人組帳前書」といい、後段の組員による連署連判(印)部分を総称して「五人組帳」という。

## 二. 条例のあらまし

多くの条文が列記されているが、主流になるものは、(イ)年貢納入を確実に実行すること。(ロ)連帯責任を重んじること。(ハ)キリス

ト宗門の排除、弾圧に協力する事等である。冒頭の第一条、続く第二条は全条文をまとめた代表的条例と云ってもいい。

ここで坪井村になく篠原村(東)固有の条文二箇条を附記する。

6 一. 年貢米を俵詰めする際、不良米は入れないよう十分注意します。

7 一. 年貢の廻米(大阪、江戸方面へ船を利用して送ること)に際しては確かな人物を同乗させて無事に届けるように努めます。

註 67の数字は順番号を示す。

## 三. 五人組帳の扱いと住民への周知徹底方法

五人組帳の最終段に、次のとおり約束の証文を明記しているのでその徹底ぶりがわかる。

「以上の箇条は村内の全員が必ず守るよう心掛けます。

名主は大小百姓の外関係者の前で毎月読み聞かせます。

若し違反する者が居たら、いかなる処罰でも受けることを承知致します。

後日の為に五人組手形を提出致します。」

## 四. 冊子発行について

五人組帳の内容把握は出来たが、冊子発行までには長いこと苦戦した。そのまじめについても識者に懇切なご指導を

受け、ようやく写真のような冊子発行にこぎつけた。平成二十二年七月の初頭であった。

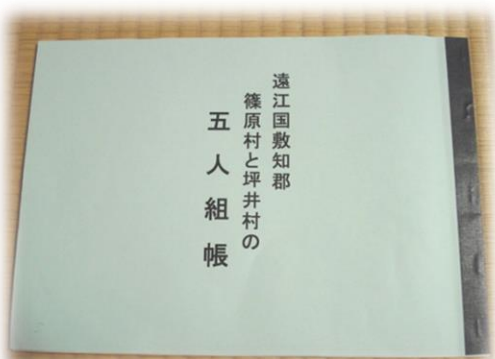
五. 五人組帳との取組みを終えて

此の時代、吾々先祖の多くは条例との関わりを持ったであろう。又五人組名簿の中に見られた多くの氏名(屋号)が目を引く。このようなことから文書との取組みにいつそう張り合いが出てきた。坪井村、篠原村(東)それぞれの五人組帳が、冊子の中に比較対照出来て良かった。史料提供者を始め、良き指導者の導き、そして温かい後援者の応援のお蔭で完成出来た。

五人組冊子の活用をお奨めにする。

## 六. 参考資料

取組んだ五人組帳の概要を比較する意味で下表に示す。



調査した五人組帳の概要

項目	坪井村五人組帳	篠原村五人組帳
発行年	弘化三年(1846)	文政二年(1819)
五人組全戸数	109戸 (本田78、新田31)	188戸
現存戸数	97戸(90%判明)	128戸(68%判明)
条文数	48条	51条

# 思うがままに

会員 鈴木照義

入会して三年余、浜風会発足二十三年目を迎えた伝統ある当会からみればまだまだひよこ、いや卵の状態の私、早く殻を破り自力で餌を啄むようになることを目指して、毎月一回の例会に参加しています。

入会の動機は会員に誘われたことがきっかけで、生まれ育った篠原の歴史に関する事を何とはなく知りたいと言っただけの単純なことでした。

例会で見聞きする内容は新鮮で幅広く興味を持ちました。加えて、新たな人との交わりが出来たことを嬉しく思っています。

退職後、公民館主催の写真講座に参加、その後同好会となり十年余、自分は花の写真を中心に

先生の指導を受けています。なかなか上達しないのですが、自分の思いを一枚の写真の中に取り込めた時には自己満足する一瞬です。自分なりに目標をもって過ごしている毎日です。

浜風会の副題である「郷土の歴史を学ぶ会」は、なかなか馴染めない事のように思いますが、篠原小学校の中に開設してある「ふるさと資料室」(郷土資料室)を見学すると、展示室には

「歩み・生活・学び・篠原地区の位置付け」の各要素に分類されたコーナーで、郷土の歴史的価値ある文化財の一部を知ることが出来ます。また一角には期間を決めて特別展示スペースがあり、今は写真で篠原地区の狛犬と、篠原にお寺が多いとして、お寺の場所が解る展示がしてあります。是非一度ご覧になっては如何でしょうか。

毎日を送っている先輩諸氏の調査研究したお話を、もっぱら耳を傾け、感心することばかりです。

## 高札

幕府や藩は人々の守るべき決まりや禁止する事を、板に書いて掲示した。これを高札といい、往還通り、市場、追分、渡し場など人目のつきやすい所に立てられた。この場所を高札場といった。また札木ともいい、篠原町にもその地名が残っている。

坪井町にも「札木前」の小字名がある。「東海道分間延絵図」には篠原、坪井、馬郡に各一カ所ずつ高札場が見られ、江戸時代には村人に布告を徹底させていたことがわかる。高札の種類、枚数は様々であったが、普通の村々では「切支丹札」「火付札」「徒党札」の三札であった。

篠原の札木のことは「篠原旧記」に記述がみられる。「後堀河院の御宇、貞永三年初めて公札を建設して御條目を取守らせ給ふによりて、此処を取守と号したり。その後徳川幕府の時、東海道往還へ転じて、ここに始めるなり。公札は元西脇にありて、昔、天下の御條目を掲げし場所にして、村民等に條目を取守らせ給ふ名なり」



坪井町の江間家から寄贈された高札は、現在篠原小学校の「郷土資料室」に飾られ、いつでも見ることが出来る。内容はキリシタン禁制、五倫(君臣、父子、夫婦、長幼、親友の五つの間柄)の道を正しくすること及び朝廷の御條理を守ることの3枚。このことは昭和33年の「篠原村誌増補篇」に紹介されている。



浜風会会報第19号  
浜松市篠原公民館同好会「浜風会」  
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
編集委員 委員長 鈴木清  
鈴木義雄 鈴木幹久 鈴木忠  
山下勝彦  
発行責任者 山下勝彦  
発行平成23年7月1日  
連絡先：篠原公民館気付